

<学校教育目標> 自ら考え、主体的に判断し、行動する、心豊かで心身ともにたくましい子どもの育成

めのと



6月 水無月

大切な命 号

長崎市立女の都小学校 学校だより

令和4年6月29日 文責 校長：松田伊知郎

<めざす児童像>

- ① あてを立ててすすんで学ぶ子
- ② そみをもってたくましく生きる子
- ③ もだちとみがきあう思いやりのある子

21日の夏至から昼の長さは確実に短くなっているようですが、暑さはどんどん増しています。梅雨明けで夏本番に向かう中、校内外で子供たちは様々なことに留意しつつ元気に生活しています。

8時からの「めのとタイム（自主や自治活動）」はずいぶん定着してきました。しっかりとした活動を経て自主的な力を身に付けている上に、続いての朝の活動や授業に落ち着いて臨むことができるため、学習の習得にも良い効果が出ているようです。諸活動を充実させ、より高い効果を得るためにも、8時までには余裕をもって自教室に入室を済ませることができる登校への御協力をお願いいたします。

～ 教訓や知識を生かした学びを… ～

今年は、未曾有の災害となった『7.23 長崎大水害』から40年目になります。保護者の皆様も「体験された方」「長崎在住ではなかったので体験していない方」「まだ生まれていなかった方」などそれぞれでしょうし、中には近親者が被災や犠牲になられたという方もおありのことと思います。

1982年7月、私は20歳になったばかりの大学2年生でした。7月23日は午後から長崎大学内やその付近にいたのですが、夕方からの豪雨で自宅がある長与町に戻ることができず、西浦上小学校の裏手の高台にある友人宅で一晩を過ごしました。災害の惨状は夜通しラジオが伝えてくれましたが、私が居た友人宅は特に被害はありませんでした。翌朝、自宅に戻るために西浦上小学校付近の川沿いまで下りてきたところ、あまりの凄まじさに声を失いました。橋は流され、浦上川沿いの道は削り取られていました。川の中に目を移すと、径が2メートル以上もあるような巨石が何個も出現し、流されてきたであろう自家用車が潰れた状態で何台もありました。

まさに『生』『死』の境目にいた私は、運がよく『生』の方に導かれたことで現在に至っています。犠牲になられた方でも、その時その場での判断は最善だったという方もおられるはずですが、自分自身では歩いてでも無理をして帰宅しなかった判断はよかったのだと思います。ただ、その判断は、帰ろうと停めたタクシーの運転手さんが「長与は大変なことになっているから行くな」と教えてくださったことに因ります。

当時と違い、今はたくさんの情報が簡単に手に入ります。事前学習も十分行うことができます。但し、その場での判断は自分が行わなければなりません。「自分の身（命）は自分で守る」です。もちろん、子供はそれが難しい場合もあるので、困難に遭遇したときに大人の指示で動くこともあります。しかし、いずれは自分で正しい行動をとることができるようにならなければなりません。そのために、学校ではその判断の材料となる正しい「知識」や判断した行動を可能にする「技能」、いくつかの判断の是非を考える「思考」、行動を自身最高のパフォーマンスとする「表現」など、『主体性』をもつための学びを行っています。目先のテストでいい点数をとるために学習するものではありません。もっと先にある『生きる力（生きて働く力）』を養い、自他のよりよい『生』を保持していくために学んでいます。



～ 安全を確認しての登校に御配慮ください。 ～

前号で、「臨時休業等、学校での教育課程の変更に関わる連絡」についてお伝えしました。大雨だけでなく、その他の事由での変更等も考えられますので、早期の御確認をよろしくお願いします。

なお、学校が登校可能と判断した場合であっても、自宅付近や自宅からの通学路で土砂崩れなどの危険な状態が発生し、登校ができないもあります。保護者が被災のため安全が確保できないと判断された場合は、一旦登校は控え、学校にその旨の御連絡をお願いします。

～ 参加、参観、ありがとうございます。 ～



『女の都小学校長崎っ子の心を見つめる教育週間』への参加、参観、ありがとうございます。25日の土曜学校では「命」に関わる道徳授業も公開し、そのほかにJRC登録式や被爆体験講話、校長講話などを通して心を耕す時間を大事にした期間となっています。これらの学習を通して、子供たちはきっとひと回り強く優しくなっていくことでしょう。教育週間はあと数日になりましたが、子供たちの学習や生活の様子、学習スタイルや新しい学習機器の活用の様子などを御覧ください。

また、感染症対策などをお願いしていましたところ、御協力いただきありがとうございます。今後も、それぞれで様々な場面での新しい生活様式への対応をお願いいたします。

リモートでの講話でしたが、真剣に聞いて考えてくれました。

～ 6月28日 校長講話（命の講話）の内容です ～

今から19年前の2003年、長崎市で中学生が4歳の子供の命を奪う殺人事件が起こりました。どうしてそんなことが起きてしまったのかを誰もが考え、学校や家庭、地域で、「子供一人一人の様子をよく見て、寄り添って、共に考えよう」と誓い、いろいろな取組を始めました。教育週間を作ったり、このように「命」について考える機会を増やしたり、道徳の時間を通して思いやりの心を育てたり、困っていることなどが無いかな尋ねたりすることにしました。しかし、それでも長崎県内で、その翌年の2004年に小学生が、更にその10年後の2014年に高校生が、それぞれ同級生の命を奪う事件が起こり、「子供達を『被害者』にも『加害者』にもしないように」という思いを更に強くしています。

さて、皆さんは「今、世界中の人が命を大切にしている」と思いますか。つい最近、学校で銃の乱射殺人事件があり、21人が亡くなった国があります。違う国では、軍事侵攻といって他の国に戦車で攻め入ったり爆弾を落としたりしたことで、たくさんの人が住む所を失い、4000人以上の命を失われています。残念ながら、私は「世界中が全員」と考えると×だと思います。

それでは、銃による事件や戦争がない日本や長崎では、「みんなが命を大切にしている」のでしょうか。私は、「命を大切にする」ということは、戦争がない、事件がないということだけでなく、自分やほかの人の考えをわかり、思いやりの心をもった接し方をすることから始まると考えます。「好きじゃないから」「面倒だから」「きついから」やらないということでも駄目です。「全員がいつも」と考えると、これも残念ながら〇ではないかもしれません。

避難訓練の時には「命を守ることに関しては99点では駄目、100点満点でなければならない」という話を、6月の全校集会で雨や暑さから命を守る話をしました。命に関することは、全員がどんな時でもできるようにしなければなりません。もし、うまくいかないことがあれば相談してください。また、困っている友達がいないか、目を向けてあげてください。自分が苦しいときも、友達や家族、先生たちなど、皆さんのまわりには寄り添ってくれる人が必ずいます。『笑顔いっぱいの挨拶』や『優しく温かい言葉』、『思いやりのある行動』などで、女の都小学校をもっと「にこわく」にして、そこから自分の命も周りの人の命もピカピカに輝かせる社会、世界を作っていきましょう。